『グラン・モーヌ』におけるベル・エポック

鈴 木 正 昭

〈目　次〉

§1　ベル・エポック
§2　黎明期のスポーツ
§3　交通手段の近代化
§4　情報伝達の迅速化
§5　博覧会
§6　学校制度の確立

§1　ベル・エポック

「グラン・モーヌ」が執筆されたのは 1910 年代のはじめのことであるが，それからまもなく 1914 年 7 月に勃発した第 1 次世界大戦のため作者は 28 歳の誕生日を目前にして戦死した．誕生は世紀末には多少間のある 1886 年であるから，その生涯はいわゆるベル・エポックの中に含まれている．

普仏戦争の終結した 1870 年から始まるのだとか，いや世紀末の 96 年からであるとかベル・エポックの開始の年代には諸説があるようであるが，終結の年に関しては異論は存在しない．したがってベル・エポックは最長に見た場合 44 年，最短の場合 19 年である．最長の場合には我が国の歴史で言えばほぼ明治時代の長さに相当するし，事実 1871 年は明治 4 年であり，1914 年は大正 3 年であるから，我が明治時代とほぼ同時代なのである．またこの期間は第 2 次大戦の終結から昭和天皇の崩御に至る歳月にも匹敵する．短く見た場合は我が国の大正時代よりも少し長い期間である．期間の長短はあるが，両者ともに戦争と戦争に囲まれた平和な時期であるという点では共通点がある．

この時期は今日我々の身の回りで見いだされるものの多くが発明されたり，実用に供されるようになったという点で現代を準備した時代である．政治的に見ると，この頃を境にして西欧諸国はいわゆる帝国主義の時代に突入して本格的な植民地獲得競争に乗り出している．植民地というものが清算された現在と，植民地獲得に各国が狂奔したベル・エポックとは，一見まったく別の時代であるように見えるかもしれない．確かに帝国主義の時代には数多くの条約や協商が締結され，帝国主義列強は互いに協力・牽制しながらそれぞれの国益を極限まで追求した．それに反して東西冷戦終結以後現在に至る 1990 年代は，そうしたしがらみをまったく断ち切った新しい時代だと考えることも一応は可能である．しかし，いずれの時代も多くの問題を抱えながらも一応の平和を維持している，という点ではきわめて類似点の多い時代

であるとも考えられる．

現代がいわゆる南北問題などベル・エポックの時代の負の遺産を多く抱え込んでいることは明らかである．そればかりでなく，かつての宗主国・植民地という関係は先進国と発展途上国という形に転移されて今日も継続していると考えられる．帝国主義時代の複雑怪奇といってすらいい条約・協商の存在も，今日ますますその数を増しているといっても過言ではない．国際化の進展は今後ともそうした傾向を深めることはあっても減少させることはないであろう．いつの時代もそれぞれの国はその利益を最大限引き出すように行動するという点では同じことである．そればかりでなく途上国の追い上げが盛んになるにつれ，経済ブロック同士の争いにより現在の平和が脅かされる危険とてなくなったわけではない．また政治・経済的な諸問題とともに，21世紀においては人類の直面する最大の問題になるかもしれない環境問題なども，ベル・エポック時代の輝かしい発明品の急激な普及とそれに伴う工業化による物質やエネルギーの大量消費に起因することは明らかである．

いずれの時代も同様であるが，ベル・エポックの時期も前の時代の多くを引き継ぎながら，新しいものを作り出し，それが次の時代を準備したという点ではなんら特異な時代ではなかった．第1次大戦後に人々はこの時代をベル・エポックという美しい名前で呼び，あたかも老人が青春時代を哀惜するようにこの時代を懐かしんだ．確かに普仏戦争の終結以後第1次大戦まで欧州大陸では戦争は起こらず，一見平和な時代だったといえなくもない．しかしながら忘れてならないのは，この時期は列強の鍔迫り合いがヨーロッパ以外の地で繰り広げられて，激しい闘争が直接ヨーロッパに住む人々の目に触れることが少なかったという点である．居住する地域が戦場にならない限り，人は意外に戦争の被害に鈍感でいられるものであることは，我が国でも中国大陸に戦場が限定されていた昭和初期の人々の暮らしが我々が今日想像する以上にのどかだったことからも容易に想像できることである．

西欧の人々が平和で豊かな生活を謳歌していた間もアジアやアフリカでは激烈な植民地獲得競争が繰りひろげられていたのであるが，人々は直接目に

触れないものにたいしては，つい軽く考えがちである．また人々は勝ち戦の場合，そして戦争が多くの利益をもたらすものである場合には，その戦争の犠牲者のことはつい失念してしまうものである．しかも大戦以前の戦争は犠牲者の数も以後の戦争とは比較にならないほど少数だったのである．

大戦が勃発したとき（1914 年 7 月），多くの人々はこの戦争は短期間で終結すると考えていたことについては以前に指摘したことがある[(1)]．年内，遅くともクリスマスまでには終わるであろうというのが大方の予想だった．ところが現実にはこの戦いは数年間の長期戦になり，死者の数も一千万人に迫る想像を絶する大戦となった．「グラン・モーヌ」の著者は大戦初期に戦死したし，親交のあったシャルル・ペギーの戦死はさらに早かった．作家の晩年の雇用主であると同時に愛人シモーヌの夫でもあったクロード＝カジミール・ペリエも生還できなかった．生涯の親友だったジャック・リヴィエールは幸い戦死することはなかったものの，捕虜になり数年間の抑留生活を余儀なくされた．狭い個人の交際範囲の中のこれだけ大きな犠牲者の存在だけからでもこの戦争の被害が未曾有のものであったことは納得されよう．大戦終了後，予測をはるかに上回る被害の大きさに人々が茫然自失したのは当然だった．ベル・エポックという美しい名前が見かけ上平和だった時代に与えられた所以である．また国際連盟のような世界平和を実現するための組織ができたことも大戦の反省がいかに大きかったかを雄弁に物語っている．もっとも，期待に反してこの組織は平和の実現にはあまりにも無力だったことは人々のよく知るとおりである．

大戦が起こるまでのフランス人にとって戦争といえばもちろん普仏戦争を意味していた．1870 年の 7 月 19 日に始まったこの戦争はフランスからの宣戦布告により始まったのであるが，ドイツ側の迅速な反撃によりフランス軍は退却を余儀なくされ，メスの要塞に籠城した．マクマホン将軍が援軍を率いて救援に駆けつけたものの，セダンで阻止されフランス軍は降伏した．同行していたナポレオン 3 世も兵士たちとともに捕虜になった．その知らせが届くとパリでは労働者を主体とする集団が蜂起し，第二帝政は打倒され

て共和制が宣言された．新政府は戦争の継続を決定したものの，結局 71 年 1 月 28 日に降伏した．5 月にはフランクフルトで講和条約が締結され，フランスはドイツにアルザス・ロレーヌ地方を割譲するほか，50 億フランの賠償金支払いを義務づけられた．

普仏戦争は「グラン・モーヌ」にも影を落としている．モーヌとフランソワに交際を求めるフランツは，頭に巻いた包帯を 1870 年のセーヌの遊撃隊員のそれにたとえている[(2)]．「不思議な屋敷」の所在地とイヴォンヌの消息を知らせるためモーヌを訪れるフランソワは，途中モアネルおばさんの家に一泊する．取っ手の欠けた陶器についておばさんはそれがプロシャ兵の所行だと説明する．そしてここでも 1870 年という年号がはっきり言及されている[(3)]．この小説は戦争終結からおよそ 20 年後の 1890 年代に設定されているので戦争の記憶がまだ生々しいものであったのは当然だった．実際にこの小説が執筆されたのは戦争から既に 40 年が経過した 1910 年代のはじめのことだった．長いようで短いのが時間というものの特性であるが，当事者にとっては「オンリー・イエスタデー」なのである．テレビや新聞で自らの戦争体験を語る人々の口振りや新聞や書籍で見かける戦争被害者の手記からもそれは明らかである．今日もなお日本政府の謝罪と賠償を求める従軍慰安婦の存在も数十年という時間によっても簡単には癒すことのできない戦争の傷跡の存在を物語っている．さらにフランスでは敗戦の直後の 71 年 3 月から 5 月まではパリ・コミューンの民衆による政権の奪取とその挫折があった．5 月 21 日には激しい市街戦の後コミューンは鎮圧された．この時殺されたパリ市民はおよそ 3 万人に上ると見られている．さらには戦犯として処刑された人の数も 1 万人にのぼる．

「グラン・モーヌ」にはまたフランスの帝国主義的侵出への言及も見いだされる．モーヌの家を訪れたフランソワはそこでモーヌの父方の叔父が土産物として持ち帰った「スーダンの革袋」を目撃した[(4)]．フランスは 1880 年代からナイル川上流のこの地域に対して野心を抱いていた．水源を押さえることにより，エジプトを勢力下におさめているイギリスに対し圧力をかけるこ

とができるからである．イギリスとフランスとの鍔迫り合いは史上名高い「ファショダ事件」にまで発展した．海軍力に劣り，またドレフュス事件を巡って国内が騒然としていたフランスが譲歩して一応の解決を見ることになった．

§2　黎明期のスポーツ

大戦前と大戦後でフランスの社会が巨大な変化を被ったことは当然であるが，大戦前に始められた制度や慣習の多くが大戦後も維持されて今日まで継続されていることもまた事実である．例えばこの時期には数多くの国際会議が開催されるようになったが，これは今日ではますます日常化している．

多数の国々がそれぞれの物産を持ち寄って展示するという万国博も同様である．万博の起原は実はベル・エポックよりも少しばかり時代を遡らなければならないが，この時代に特にフランスでは繰り返し開催され今日に及んでいる．我が国でも 1970 年の大阪万博に始まり，科学博，花と緑の博覧会に至るまで何度も開催されたことはまだ記憶に新しい．オリンピックも同様でベル・エポックの時代に始められ今日ますます盛んになっている．

今年（1996年）は近代オリンピックが復興されてから百年目の記念の年に当たり，アトランタで記念大会が開催され盛況のうちに終わった．近代オリンピックの復興は誰もが知るようにフランス人ピエール・ド・クーベルタン男爵の尽力に多くを負っている．

ベル・エポックのスポーツの興隆にはフランスの場合は 1870 年の普仏戦争の敗北が関わりを持った．敗因を追求するため，それまでのフランスとフランス人のあり方に対して深刻な検討が加えられた．戦争に対する備えがプロシャに比べて遅れていたのではないか，重大な作戦上の失敗があったのではないか，といった意見と並んでフランス人の体力がプロシャの人々のそれに比べて劣っているのではないかというのも有力な意見の一つだった．こうした考え方の淵源はナポレオンとの戦いに敗れたプロシャにあった．敗因に

検討を加えた結果，プロイセンでは体育が重視され，大幅な体位の向上がもたらされた．惨敗を喫したフランスでプロシャの例が参考にされたのは当然のことだった．

クーベルタンのオリンピック再開の主張もこうした時代の雰囲気と決して無縁のものではなかった．ただし，こうした意見が多く見られた割にはフランスにおける体育の普及は必ずしも順調には進まなかった．その原因は画一的な強制を嫌うフランス人のメンタリティーに求めるのが妥当なのであろう．

第1回のオリンピック競技大会は古代オリンピックの故地ギリシャで96年に開催された．それ以来今日までのオリンピックの目覚ましい発展は時には商業主義への傾斜を批判されながらも止まるところを知らない．ところがオリンピックも最初から今日ほど多くの注目を集めたわけではなかった．第2回オリンピックは1900年5月14日からパリで開催された．折からパリでは万国博も開催されていた．クーベルタンの熱意にもかかわらず，この第2回大会は失敗に終わった．原因は万博委員会が別のスポーツ大会を開催し，むしろそちらの方がより多くの注目を集めてしまったからである．[(5)]

当初クーベルタンは1900年の万国博にあわせてオリンピックを復興したいという意図を持っていたようである．しかしながら1892年にオリンピック準備のため開催された国際会議では8年間ものブランクは長すぎるという反対意見が多数を占めた．そのため急遽1896年に古代オリンピックの故地であるギリシャでの開催が決定されたといういきさつがあったのである．[(6)] さらに成績優秀な競技者に授与される金，銀，銅のメダルのアイディア自体も万博からの借用だった．万博では優秀な展示品に対して金，銀，銅のメダルが授与されていたのである．[(7)] 万博にせよ，オリンピックにせよ，遠方の国々から多くの人間や工業製品を短時間で運ぶことが可能でなければ成立しないイベントである．また様々な連絡を可能にするためには遠く隔たった地域と短時間で情報の交換が可能でなければならない．そしてこの時代には既にそれを可能にするインフラストラクチャーが存在したからこそこのような

イベントを企画することが可能になったのだし，またそれを企画立案する人物も現れたのである．

オリンピックが盛んになるにつれてスポーツそのものもますます多くの人々の支持を集めるようになっていった．今日では人々の健康への関心からスポーツはますます多くの人々を引きつけているし，さらに長寿社会の進展は中高年者のスポーツへの参加を促進している．都市には多くのスポーツクラブがあるし，青梅マラソンなどの参加者は年を追って増加の一途をたどっている．大学のクラブ活動においてもスポーツクラブは多くの学生を集めている．「見る」スポーツばかりでなく，「する」スポーツも盛んなのが今日のスポーツの特徴であるが，それはベル・エポックから始まったのである．

スポーツは古代から存在した．しかしそれはつい最近にいたるまでごく限られた人々だけが享受することができた．洋の東西を問わず狩猟が貴族たちに特に好まれたスポーツだった．よく知られているようにスポーツという語は元来狩猟を表す語だったのである．大部分の人間に余裕とか余暇という言葉がほとんど無縁のものであった時代には，スポーツが人々の生活に入り込む余地がなかったことは当然である．スポーツが多くの人々の暮らしの中に入り込んだのも 19 世紀末のベル・エポックの時代である．スポーツが支持を集めるようになったのは，ブルジョアジーが 19 世紀も後半にはいるとそれだけ経済的な実力をつけ，生活に余裕が生じたからである．もちろんそれは今日と比較すれば少数の愛好者にすぎなかった．当時の労働者の家庭ではエンゲル係数が 60% を越えていたが，富裕なブルジョア家庭では 20% に過ぎかなった[8]．労働者がスポーツを楽しむことができるのはもう少しの時が必要だったのである．それでも 1902 年から 1907 年の間にスポーツ団体は倍増し，1907 年から大戦前年の 13 年の間には 3 倍増とその支持者は増加の一途をたどっていった[9]．

(1) 競　馬

この時代には今日から見れば限定されてはいたけれども多くの人々がス

ポーツをするようになった．そればかりでなく，ほぼ時を同じくして「見るスポーツ」も盛んになった．たとえば英国では今日の日本同様のプロのサッカーチームによる試合が人気を集めていたし，競馬も多くの観衆を集めていた．アスコット，ダービー，オークスといった競馬場の名前はこのスポーツにほとんど興味や関心を持たない人々でも耳にしたことがあるに違いない．競馬というスポーツはその起源は古代ギリシャにまで遡る．ホメロスの「イリアス」には戦車競馬が登場する．この競技は古代のオリンピックの競技種目にも取り入れられた．「グラン・モーヌ」では，フランソワの祖父母を迎えにいくと偽ったモーヌが農場から逃走する場面でこの古代競技への言及が見いだされる．「足を前に出し，ローマの戦車の御者のようにまっすぐ上体を起こし，両手で手綱を揺さぶりながらモーヌは馬を全力疾走させた．」(10)

現代の競馬の直接の先祖に当たる競技の発祥地はイギリスである．14 世紀のことである．競馬に賭が持ち込まれるにつれ，より速い馬に対する需要が増大し，アラブ産の牡馬が輸入されて，イギリス原産のポニーの牝馬とがかけ合わされた．これがサラブレッドの先祖になるわけである．現在競馬は世界 80 カ国以上で行われている．日本では幕末横浜の外人居留地で行われたのが始まりである．このときはもちろん外国人だけの競技で日本人の入会は認められなかった．

「グラン・モーヌ」ではフランツとヴァランチーヌとの結婚式（後者の逃走により失敗に終わった）の行事の一つとして子供たちによる競馬大会が実施された．もちろん子供たちのことであるからポニーによる競馬大会であったことは言うまでもない．「騎手の服を着た男の子たちや，サーカス用の服を着た女の子たちが，リボンをつけた飛び跳ねる子馬を連れたり，おとなしい老馬を連れていた．叫び声や子供の笑い声や賭けたという声やながく打ち鳴らされる鐘の音に取り囲まれ，人々はどこか小さな競馬場の刈り込まれた緑の芝の上に連れて行かれたような気がした．」(11)

(2) 水遊びとヨット

この時代には今日多くの人々に好まれているほとんどすべてのスポーツが既に登場しているが，海水浴，ヨット遊びなど水に親しむスポーツの場合も事情は同じだった．フランスではこの時代に北部のトゥルービルなど海辺の避暑地が人気を集めるようになった．海水浴とヨット遊びというのはいわばワンセットになった水辺の遊びであり，百年後の今日もますますその愛好者は増大している．こうしたスポーツはフロベール，プルーストといった作家たちの作品を通して我々にも親しいものになっている．

このようなスポーツ先進国イギリスからフランスにスポーツをもたらしたのは，革命を避けてイギリスに亡命していた貴族たちだった．人間は古代から健康回復や健康増進のため海水に浸かっていたが，それはあくまでも健康法の一環としてであり，水遊びではなかった．18 世紀のイギリスで海辺の空気を吸って，きれいな海水に浸かり，またその水を飲むことの効用が積極的に唱えられるようになった．人々は水着に着替えたけれども，まだ泳ぐことはしないで腰まで水に浸かったまま立っていたのである．水浴マシーンとして大きな車輪の馬車が作られ，その馬車で海に乗り入れて，馬車から直接海に入る人も登場した．フランソワやドゥルーシュはスーレル先生に引率されてシェール河に行くけれども，これもスポーツとしての水泳ではなく，水遊びであった．ここでフランソワは，モーヌとともに探し求めて結局突きとめることのできなかった「不思議な屋敷」の所在地を知ることができたのである．（水の持つ情報伝達機能については以前に検討を加えたことがある．[12]）

水泳も海水浴同様古代から身体の鍛錬の手段として盛んに行われていた．古代ギリシャ，ローマではとりわけ重視されていた．

海水浴は，イギリスのブライトンで海水浴をした思い出を懐かしんだフランスの貴族階級の人々がブライトンによく似たトゥルービルの海岸で海水浴をするようになったのがその起源であるといわれる．もっとも当時行われていたのは海水浴であり，水泳ではなかったようである．あくまでも健康のた

め海水に浸かるのであり，そういう意味ではスポーツという語を与えるのは不適切であるかもしれない．当初は他のスポーツ同様貴族階級に限られていた海水浴の愛好者は，第二帝政期になってブルジョアの支配が決定的になり，交通の便も汽車の利用で大幅に改善されると，急速にこの新たな支配階級の間に普及した．今日でも我々が当時の写真でよく見かける，体の大部分を覆う水着を身につけた女性たちがトゥルービルの浜辺で海水浴をする光景は，それまで長いドレスで体全体を隠した女性しか知らなかった人々の好奇心を大いにそそった．このトゥルービルの繁栄は後にはドービルに奪われた．こうした避暑地ではフロベールの「狂人の手記」やプルーストの「失われた時を求めて」でおなじみの光景が至る所で見られたのである．

これらの海辺のリゾート地ではもちろん海水浴だけでなく，ヨット遊びなども盛んに行われた．さらにはテニス，自転車，ゴルフなども平行して普及していった．その他スポーツではないが，夜の楽しみとして観光地につきもののコンサートやギャンブルなども提供された．「グラン・モーヌ」の結婚式ではポニーによる競馬だけでなく，船遊びも取り込まれていた．モーヌはイヴォンヌと同じ船に乗り込むことではじめて彼女を間近に眺めることができたのだった．「その後モーヌはどれほど激しい感動とともに池の畔で間近に眺め，それ以後は見失われてしまったその少女の面影を眺めた瞬間を思い出したことだったか！[13]」船遊びが可能にした両者の遭遇こそが本編の縦糸であることは言うまでもない．

ヨットの起源は 17 世紀オランダにある．この時作られた快速帆船がヤハトと呼ばれ，それがヨットという呼び名のもとになったのである．後にフランツとヴァランチーヌを除き結婚式に集まったのとほとんど同じメンバーにより水辺の遊びが催された．この時モーヌはイヴォンヌにヨットのことを繰り返し尋ね彼女を苦しめたのである．「以前あったようなガソリンで動くボートや蒸気船があるといいですね．」「もうありませんの．売ってしまいましたから．[14]」ガソリンで動く船もまたこの時代の発明品だったのである．

こうしたスポーツの盛況は富の増大によって政治的な発言力を増し，豪邸

を建て，おしゃれをし，御馳走を食べられるようになったブルジョアたちのスノビズムの発現だった．貴族たちがすることを自分たちもしてみたいという欲求を発現することのできる時代が到来したのである．ところが一方，お手本にされた貴族は没落の一途をたどっていった．それはイヴォンヌが生まれたド・ガレー家もその例外ではなかった．フランツが出奔してまもなくガレー家は土地の大半を手放すことになった．そしてそれを手に入れた側はそこを狩猟の場とするため荒れ果てるに任せていた．ベル・エポックは海外で激しい植民地獲得競争が繰り広げられていたばかりではなく，国内では立場の逆転が頻繁に起こった下剋上の時代でもあったのである．

貧乏暇無しだった庶民にたいし，富と権力の獲得により社会を制覇したブルジョアたちが，余暇を誇示したかつての貴族の真似をする時代が到来したのである．あるいは自分たちが新たな貴族階級になりたいと思ったのである．よく知られているようにヨーロッパでは労働は苦役とみなされ，それから解放されることを古代から求めてきたのであるが，そうした理想がブルジョアジーにも手の届くものになったのである．今日でも我が国の勤労者には退職した途端に何をして余暇を過ごしたらいいのかわからないでノイローゼになる人が少なからず存在するようであるが，欧米では退職するとこれからは好きなことをして過ごせるというのでますます元気になる人が多いといわれるのも彼我の伝統の相違によるのである．

余暇の普及はフランスだけのことではなく，いわゆる西欧諸国でほぼ時を同じくして多かれ少なかれ見られるようになった現象である．それぞれに異なる文化・風習を持つとはいえ，西欧諸国はアジアの国々と比較してきわめて同質性の高い地域であることは議論の余地がないであろう．とはいえ，資本主義化の進行にはいくらかの差異が見られたことも事実である．先頭を切っていたのはもちろん大英帝国だった．我々になじみ深いスポーツの多くがその起源をイギリスに持つのは偶然ではない．大英帝国こそは最も早く資本主義化が促進され，ブルジョアジーが最も早く台頭したからである．学校の名前そのものが名称になったラグビー，またフランスのジュー・ド・ポーム

を起源に持つといわれるテニス，さらに今日もオックスフォード，ケンブリッジ両大学の対抗戦で人気を集めているレガッタなどイギリスから世界に広がったスポーツは枚挙にいとまがないほどである．ついでながら今年（1996年）伊達公子選手が好成績を修めたウィンブルドンのテニス選手権大会は1895年に第1回大会が開催されている．

このようにスポーツを急激に普及させたのはブルジョアジーの貴族的生活に対する願望であった．健康にいい，などというのは後からつけられた理屈である．よく言えば余裕を手に入れたブルジョアたちの上昇志向，悪く言えば彼らの成金趣味がその根底にあったことは確かである．

§3　交通手段の近代化

交通においてもベル・エポックは今日我々が利用する手段のほとんどを用意した時代である．こうした目覚ましい科学や技術の発展は帝国主義の進行と軌を一にしていた．遠隔地との通信・運輸には短時間かつ速やかな手段が要請されたし，新しい技術がさらなる帝国主義の進展を可能ならしめたからである．

1869年にはアメリカ大陸横断鉄道が完成し，スエズ運河の通行が可能になった．鉄道の発明はベル・エポック以前のことであるが，この時代に世界各国に普及し営業キロ数は著しい増大を見た．今日美術館に改造されたオルセー駅は1900年の万博に間に合うように建設されたことはよく知られている．レール，車輪，機関車にも改良が加えられた．

「グラン・モーヌ」では鉄道はもはや日常生活でのごくありふれた交通機関として主人公たちに利用されている．ヴィエルゾンの駅まで鉄道でクリスマス休暇を過ごしにやってくるフランソワの祖父母を駅まで迎えに行くところからこの物語は始められた．またフランツとの結婚式から逃げ出したヴァランチーヌは冬の間モアネル夫妻に匿われた後，春になると汽車に乗ってパリへ去っていった．このモアネル夫妻の家に幼い頃のフランソワは父ととも

に時々宿泊し，そこから早朝汽車に乗って股関節炎の治療に通った．ヴァランチーヌが春になってパリに去ったのと同じ頃，サント・アガトからイヴォンヌを探索すべくパリに出たモーヌは，彼女のパリでの滞在先と教えられた建物の前でヴァランチーヌと遭遇することになった．

この時代になると，地方では短距離の移動には馬車がまだ活用されていたものの長距離の移動には鉄道が日常的に利用されていたことがわかる．フランスの鉄道はイギリスには遅れをとったが，40 年代にはいると敷設が開始され，パリ・カレー間，パリ・ルアーブル間が完成された．50 年代にはいるとパリ・ボルドー間，パリ・ストラスブール間も完成を見た．

自動車は 60 年代から製造への試みが積み重ねられていた．80 年代に入り，ドイツ人ダイムラーが軽油を燃料とする小型の内燃機関を搭載した今日のものとほぼ同じ自動車の製造に成功した．これはフランスに直ちに紹介され，95 年にはパリ・ボルドー間のレースが開催されるほど急激に新しいものを好む人々の間に愛好者を増やしていった．とはいえ，この小説と同じ 90 年代には自動車はまだまだ揺籃期にあり，ごく限られた人々がスリルを楽しむための器具であり，スポーツ用のマシンに過ぎなかった．一般交通機関として利用されるほどには成熟した工業製品ではなかったのである．イヴォンヌを探しあぐねて懊悩するモーヌの耳に届くのはパリの町中をかける辻馬車の蹄の音であり，自動車のクラクションではなかった．今日まで残されている当時の写真を見ても，町中を走る車はごく少数で圧倒的に馬車が多かったことが確認できる．その後 1902 年には大西洋の彼方のアメリカでフォードが大量生産を始め，世界は 20 世紀の到来とともにモータリゼーションの時代に突入したのである．ついでながら写真は既に 1820 年代から存在したが，大衆が気軽に写真を写してもらうようになったのは 50 年代のことだった．小説中にもフランソワの父の師範学校時代の写真とか，死んだイヴォンヌの写真を探すガレー氏の姿が見いだされる．写真は第三共和制の，と言うよりは第二帝政時代の偉大な発明の一つだったのである．

船の世界もこの時代には大きな変化を被った．帆船が減少し汽船の時代が

到来していた．古代からの帆船時代は 19 世紀前半にその黄金時代を迎えたけれども，スエズ運河が開通した頃から決まった日時で目的地に到達できる汽船が優位に立つようになっていた．それ以後帆船は主としてレジャー・スポーツでのみ余命を保つことになった．汽船の船体は鋼鉄製が主流となり，スクリュー・プロペラにより動くように改良が加えられた．世紀末にはジーゼルエンジンも用いられるようになった．

こうして様々な発明改良が世紀末に集中的に行われたけれども，すべてが瞬く間に変わってしまったわけではない．あるものは直ちに広く用いられ，他のものは普及に手間取ったという相違は確かに存在する．鉄道はベル・エポック以前から存在したけれども，この時期になって日常的な乗り物になったのである．

地下鉄はフランスではこの時代にお目見えした交通手段であった．それ以前から鉄道馬車，1880 年代にはいると市街電車が利用されていた．電車の音は作品中にも鳴り響いている[15]．しかしながら電車に対しては他の交通機関の進行の妨げになるという苦情が多くなり，その解決策として地下鉄という交通システムが採用されたのである．地下鉄は 60 年代にロンドンに敷設され次第にヨーロッパ各国へ広がっていった．だから決してベル・エポックの発明というわけではなかった．この分野でも先頭を切ったのはイギリスだった．フランスは様々な理由により導入が他の西欧諸国から大幅に遅れ，1900 年の万国博に間に合うようヴァンセンヌとポルト・マイヨー間に敷設された．ほとんど信じがたいことであるが，30 年以上の遅れだった．ヨーロッパの他の都市であれば当然地下鉄を利用したであろうモーヌやヴァランチーヌは 90 年代になっても地下鉄に乗ることはなかったのである．

飛行機もまたこの時代の発明の一つだった．ドイツ人リリエンタールがグライダーによる滑空に成功を収めたのは 91 年のことだった．またライト兄弟による人類初の動力飛行は新しい世紀に入った直後の 1903 年のことだった．1909 年にはフランス人ブレリオによるドーバー海峡の横断が行われた．「グラン・モーヌ」の著者もこうした新しい発明には大きな関心を抱いてい

たことは，リビエールとの書簡集などからもうかがうことができる．しかし小説には飛行機に関する言及は見いだされない．

(1)　自転車

自転車の原型になる乗り物は 18 世紀末には既に発明されていたのだが，今日のような自転車が普及するのはベル・エポックを待たなければならなかった．第 2 帝政期になって大きな前輪を持つタイプの自転車が発明されて人々の人気を集めた．だがこのタイプの自転車はその形態から容易に想像されるように，きわめて不安定な乗り物でたとえ低価格で提供されても万人の乗り物になることはできなかった．さらにゴム製のタイヤがなかったので乗り心地も大変悪かった．今日我々が利用している自転車とほぼ同じものになったのは 1880 年代の終わりにイギリスのダンロップによりチューブ付きのゴムタイヤが発明されて以来のことであり，それがベル・エポックの時代に爆発的な流行を見たわけである．

自転車は比較的安価に提供された工業製品だったため，短期間に急速に普及した．世紀末にはヨーロッパの主要国には既にそれぞれ数百万台の自転車が普及していた．これは女性の間にも多くの愛好者を生み，その結果として自転車に乗りやすいニッカーボッカーが考案された．さらに自転車製造業者やマスコミは自転車を利用してそれぞれの業務の拡大につとめた．それはサッカー，テニスなどと同じく自転車を見るスポーツに変えた長距離のロードレースの開催である．ダンロップに対抗するタイヤメーカーのミシュランは 1891 年にパリとブレスト間のレースを始めたし，「オート・ベロ」誌は今日でもフランスで最も人気のあるスポーツの一つであると言われるツール・ド・フランスを開催することで販売部数の拡大をはかった．

確かに自動車などと比較すれば自転車は購入しやすい商品ではあったが，まだ地方の上層階層は別にして，庶民がそれぞれの家に所有するほどまで普及するのにはまだまだ時間が必要だった．1890 年代に設定された「グラン・モーヌ」には登場人物たちが自転車を利用する場面がしばしば登場す

る．つまりはダンロップによって現在のものとほぼ同じ自転車が製作され，急速な普及をみたとはいえ，都会と地方とのタイムラグが今日とは比較にならないほど大きかった当時においては，地方の中流の家庭にまでは遍く行き渡ってはいなかったのである．だからこそサント・アガトの子供たちの中で唯一自転車を所持するジャスマン・ドゥルーシュはモーヌが去った後ボスの地位を獲得できたのである．彼はもっぱらそれに乗っては女の子たちを追い回すのに用いていた．もっとも彼がボスになれたのは自転車以外にもロバをつなぐことのできる馬車やベカリという名の犬をも所有していたからである．

ドゥルーシュの言葉から「不思議な屋敷」の所在地が親戚のフロランタン叔父さんの住むビュー・ナンセであることを突きとめたフランソワは確認のため叔父の家を訪れて，実際にイヴォンヌにも会うことができた．モーヌにその「重大なニュース」を知らせるべく，フランソワが利用するのが自転車だった．フランソワももちろんドゥルーシュの自転車を借りてその操縦法を会得したのである．

「ふつうの若者にとって自転車がおもしろいものであるなら，かつては4キロも歩くと汗にまみれて惨めに足を引きずっていた僕みたいにかわいそうな男の子におもしろくないと言うことがあるはずがないではないか．丘の上から降りていって風景の窪みに突っ込んでいくこと，羽ばたいたかのように近づくと道路の前方がさっとひらけ，花が開いたようになることを見いだすこと，一つの村をあっと言う間に通過してしまい，一目で全体を持ち去ること……これまでは僕はこれほど魅力的で，これほど軽やかな走りは夢の中でしか知らなかった.[16]」ここには自転車という新しい乗り物の与える喜びが過不足なく表現されている．ましてフランソワは足に障害のある子供という設定で，物語の進行とともにその障害が癒されていく過程で身体の自由がもたらす喜びが何ヵ所か述べられているが，自転車によってもたらされた軽やかさがあたかも鳥の飛翔を獲得したような最大級の喜びとして述べられているのである．

フランソワとモーヌは翌日自転車でフロランタン叔父さんの家に駆けつけることになるのだが，モーヌの自転車はもちろん自己の所持品ではなく，借り物だった．自転車による情報の伝達によって「不思議な祝典」の模倣である「野遊び」が開催されることになったわけである．

ヴァランチーヌと喧嘩別れしたモーヌは，後に行方不明になった彼女の消息を求めて彼女の家のあるブルジュを自転車で訪れる．もちろんこの際も自転車は借り物だった．モーヌとイヴォンヌの結婚式当日，ヴァランチーヌの探索に連れ出すためガナッシュとともに久しぶりに姿を現したフランツは，馬車を遠方に止めて自転車でやってきたのである．

§4　情報伝達の迅速化

この時代には情報伝達の手段も大きな変革を被った．郵便制度は古く古代ペルシャから存在したのであるが，18 世紀になりイギリスでペニー郵便が始められ郵便制度の近代化が図られた．これは今日の制度にきわめて類似した仕組みであったが，国家の弾圧を受けて廃止された．19 世紀に入りローランド・ヒルによって全国均一料金の郵便制度が確立した．そして郵便料金は前納とし，切手によって支払うこととされた．1840 年のことである．以後各国はこのイギリスの郵便制度に倣うことになった．そして国と国との間での郵便のやりとりに関して統一的な組織が要求されるようになり，1874 年にはスイスのベルンで万国郵便連合が結成された．

電信は鉄道の普及とほぼ軌を一にしているが，1860 年代の終わりには海底電信も可能になった．66 年にはヨーロッパとアメリカが，70 年にはヨーロッパとインド及び極東とが海底電信で結ばれた．また 1876 年にはグラハム・ベルにより電話が発明され，早くもその翌年 1877 年（明治 9 年）には我が国にも輸入されている．もっとも電話業務の開始にはそれから 10 年以上の時間が必要で，1890（明治 22 年）を待たなければならなかった．翌 91 年には英仏間に海底電話が敷設された．96 年にはイタリア人マルコーニに

より無線電信が発明され，20 世紀にはいると大西洋を越えてヨーロッパとアメリカ間の無線通話が可能になった．

ベル・エポックには遠隔地との通信手段が次々に発明されたけれども，これが一般の家庭にまではいるのにはまだまだ多くの時間が必要だった．したがって「グラン・モーヌ」では通信手段とは手紙のことである．パリに出たモーヌはフランソワ宛に 3 通の書簡を送るし，同じくパリに出たヴァランチーヌはモアネル夫妻に近況報告の手紙をたびたび書いている．主人公たちは情報伝達のために近くであれば歩いていくか，少し離れていれば自転車に乗って伝えに行くか，それが不可能な遠方であれば手紙によって通信するという世界の住人なのである．文明の利器は双方にその機械設備がない限り利用価値はあまりないものなのである．事情は今日でも同様で，ファックスこそこのところかなり多くの家庭にまで普及しているようであるが，電子メールとなれば交信相手は相当に限定されてしまう．

電報は 51 年以来民間にも開放されていたが，この小説ではコミュニケーション手段として利用されていない．電話も既に発明されていたことは上に述べたとおりであるが，それから 20 年近くが経過してもサント・アガトの住民たちはまだこの便利な通信手段の恩恵に浴してはいなかったのである．昨年あたりからの携帯電話や PHS の急激な普及を目にしている我々にとっては，これは信じられないほど緩慢な速度である．しかしつい何十年か遡れば，我々の周りの電話の普及の速度もまたきわめて遅々としたものだったことは中高年の人なら記憶しているであろう．明治時代に入って間もなく西欧諸国とほぼ同時に導入されたにも関わらず，電話が一般の家庭にはいるのは昭和も 30 年代を待たなければならなかった．普及するためには驚くべきことに 80 年という天文学的な歳月が必要だったのである．

§5　博覧会

交通・通信の発達は当然のことながら世界を小さなものにし，国と国との

関係をより密接なものにしていった．もちろん一つの世界への歩みは大航海時代の開始とともに始まると言っていいが，それはあくまでも探検家，冒険家，野心的な商人のそれであり一般大衆が船に乗り外国に行くという機会は船乗りにでもならない限りほとんどなかった，と言っても過言ではなかった．それどころか自分の生まれ育った町や村からほとんど出たことがないという人間はいくらでも存在したし，むしろそれが普通だったのである．これは我が国の場合も同様だった．外国旅行が普及するには人々の生活水準が上昇して金銭的にも時間的にも余裕を持つことが先決であるし，それに加えて交通機関の進歩，旅行代理店の存在，ホテル等宿泊設備の充実などが必要である．そしてそれらが一応整ったのがベル・エポックの時代だったのである．

ヨーロッパ諸国では鉄道が普及し始めた 19 世紀半ば頃から，それぞれの国の物産を一堂に集めて展示する万国博覧会がたびたび催されるようになった．それ以前にも同様の試みがまったくなされなかったわけではなく，例えば 18 世紀中頃に早くもロンドンで工業展示会が開催されている．しかし本格的な万国博覧会が，しかも定期的に開催されるのは 19 世紀の中葉を待たなければならなかった．

数多い博覧会のなかでとりわけ有名なのは 51 年にロンドンで開催された万博である．ジョセフ・バクストンが設計したガラス張りの「水晶宮」はあまりにも有名である．この建物は，以後つくられるのが慣例になった万博を代表するシンボリックな建築物の嚆矢となった．例えば 1889 年のパリ万博のエッフェル塔，1900 年の同じくパリ万博のプチ・パレ，グラン・パレはとりわけ有名である．身近なところでは 1970 年，大阪の千里丘陵の岡本太郎作「太陽の塔」を思い出してもいい．

ロンドン万博が大成功をおさめたため各国は争って自国に招致するようになり，万博ラッシュの時代を迎えた．ベル・エポックの時期はこの万博熱が最高潮に達した時期である．

万博の開催にとりわけ熱心だったのはフランスである．第二帝政時代（ナ

ポレオン 3 世時代）の 55 年，67 年，第三共和国時代の 78 年，89 年，1900 年と 19 世紀後半に 5 回もの万国博を開催している．最初の二つが第二帝政時代，後の三つがベル・エポックの時期になるわけである．このうち 67 年のそれは我が国が初めて参加した万博として知られている．その際，幕府と薩摩双方が個別に出品してそれぞれの正当性を主張したことは時代劇などでも時々取り上げられるので知る人も多いであろう．

サント・アガトに現れたフランツは様々な国々の様々な珍しい玩具類を同級生たちに見せびらかして彼らを熱狂させる．それはあたかも極小規模の万博が開催されたかのごとくだった．生徒たちはパリ万博に熱狂する見物人と同様の興奮状態に陥っている．「不思議な屋敷」での結婚式で多くの催し物を見て回るモーヌの姿は，博覧会を隅から隅まで歩き回る入場者やルーブルなどの巨大な美術館を見て回る観客を彷彿とさせる．博覧会や美術館で疲れた人が休憩を取るようにモーヌも提供される娯楽に疲れ，静かな部屋で疲労を癒すのである．この「不思議な屋敷」自体がモーヌにとっては水晶宮であり，ルーブル美術館なのである．

美術館を表すミュージアムはギリシャ神話のミューズに由来することはよく知られている．美術館の起源は紀元前にまで遡ると言われているが，近代的な美術館が登場するには 18 世紀を待たなければならなかった．すなわち 1753 年の大英博物館である．産業革命にいち早く突入したイギリスはこの分野でも世界に先駆けたのである．フランスでは少し遅れて 18 世紀末の大革命後にルーブル美術館が一般に公開され，世界最初の公立美術館となった．

ベル・エポックの時代は生活水準の向上や交通機関の発達に伴い，人々がそれまでに比して格段に行動半径を広げた時代である．そしてそれによって生み出された余暇や余裕の相当部分が旅行に費やされた．そして旅行には新時代の交通機関である汽車が利用された．人々の移動が激しくなるにつれ旅行に関する業務を一つのビジネスにする者も登場した．早くも 1841 年にはイギリスのトマス・クックにより今日の旅行代理店とほぼ同様のサービスを

提供する企業が組織された．彼はもともとはバプティスト教会の伝道師であり，労働者の禁酒運動に携わっていた．禁酒大会に労働者を引率して出席することになった彼は，列車を借り切って格安な運賃で目的地まで彼らを運ぶことを思いついたのである．まとめて運ぶ代わりに格安な料金を設定するという営業形態は人々の支持を集めた．切符を自ら買い，ホテルの予約をするという煩わしさから解放された人々はますます容易に旅行することが可能になり，それがまたさらなる旅行熱をかき立てることになったのである．とりわけ 55 年のパリ万博からはヨーロッパ大陸にまでその適用範囲が広げられた．このあたりから海外旅行の大衆化が始まったのである．

6　学校制度の確立

「グラン・モーヌ」は一つの学園小説として読むことも可能な作品である．主人公たちの真のドラマは「不思議な屋敷」やパリなど学校以外のところで繰り広げられることが多いとはいえ，物語のフレーム自体はフランソワ・スーレルという少年の目を通して眺められた一連の出来事である．そして少年の父母は教員として同じ学校で教え，少年もその学校で起居しているからである．また後には少年自身も教員となり，そこへ様々な情報が送られてくるからである．少年は定点としてあまり学校から離れることはない．彼が股関節炎で運動能力の点では少し不自由な存在として設定されたのはおそらく偶然ではない．彼の生活の場である学校は同時に役所も兼ねていた．少年の足の具合は小説の展開と同時進行的に回復し，少年も後半になるほど行動力を獲得して筋の展開を押し進める役割を担うようになるのは以前に見たとおりである．

学校はいうまでもなく人類の知識の体系を組織的に教授する場所であるが，それは必ずしも今日我々の周りにある学校という形態である必要はない．たとえば我が国の江戸時代には寺子屋と呼ばれる民間の教育機関が主として生活に必要な「読み，書き，そろばん」を教えていた．現在あるような

形態の学校が出現するのは我が国では明治 5 年の学制以降のことである．この年は西暦では 1872 年にあたるが，これは世界的に見てもむしろ早い時期に属する．我が国ばかりでなく，多くの国では近代国家の成立と時を同じくして，教育制度の近代化が開始された．すなわち公立による普通初等教育である．そして各国は争ってその普及につとめたことは言うまでもない．イギリスでは 70 年に宗教系の学校に対する補助金の増額及び公立学校の創設が法制化された．ドイツでは帝国成立の翌年の 72 年に従来のプロイセンの制度を帝国全土に拡大することが決定され，学校の教会からの分離も確立された．スイスでは 74 年にすべての児童を州立の学校へ通学させることが義務づけられた．イタリアでは 77 年に同様の決定がなされた．

フランスでは 78 年から 81 年にかけて初等教育及び教員養成システムの法的な整備が行われたが，いまだ義務ではなくしかも有料だった．通学が義務づけられたのが 80 年，無料になったのは 86 年のことだった．こうして見ると我が国の明治時代の動きが先進国と同じ歩調で進んでいたことが了解されるであろう．フランソワやモーヌはフランスの近代教育制度の最も早い時期に属していたのである．「彼が僕たちのところにやってきたのは 1890 年代のある年の 11 月の日曜日のことだった」[17]というのが小説の書き出しである．

90 年代のフランスは 94 年のドレフュス事件という大きな政治的事件で揺さぶられた時期でもあったが，同年締結された露仏同盟によってビスマルク以来強いられてきた孤立から解放された時期でもあった．こうしてヨーロッパはドイツ，オーストリア，イタリアとフランス，ロシアという対立の構図ができあがったのである．徐々に大戦時の敵対関係が形成されていったのであるが，イギリスが後者に荷担したことがそれを決定的なものにしたことは言うまでもない．しかし世界はこの時点からなお 20 年ほどは平和な時代を享受することになるだろう．

〔注〕

(1) 鈴木正昭「最後の日々」『中央学院大学人間・自然論叢』第 3 号，1995 年 12 月.

(2) Alain-Fournier, LE GRAND MEAULNES, Librairie A. G. Nizet, 1983, p. 106. 以下 G. M と略記.

(3) G. M, p. 164.

(4) G. M, p. 175.

(5) 鹿島茂『パリ・世紀末パノラマ館』角川春樹事務所，1996 年，p. 38.

(6) 鹿島茂『パリ時間旅行』筑摩書房，1993 年，p. 202.

(7) 鹿島茂，同書，p. 202.

(8) Dominique Lejeune, LA FRANCE DE LA BELLE EPOQUE 1896-1914, p. 120.

(9) Ibid., p. 155.

(10) G. M, p. 20.

(11) G. M, pp. 72-73.

(12) 鈴木正昭「グラン・モーヌにおける水の機能」『中央学院大学教養論叢』第 3 巻第 2 号，1991 年 1 月.

(13) G. M, p. 70.

(14) G. M. p. 183.

(15) G. M. p. 139.

(16) G. M, p. 162.

(17) G. M, p. 3.